

## 「もう一つの国宝を作れ」 国宝の現状模写に挑んだ芸術プロジェクト。

2011年9月9日～9月25日、東京藝術大学大学美術館で「源氏物語絵巻」の現状模写展示会が開かれた。若き画家56名が7年の歳月をかけて国宝の絵巻を精密に模写し、完成させたものだ。平安時代の絵巻を平成時代に甦らせた壮大な芸術プロジェクトである。

当時と同じ紙と絵具を用いて、  
本物と寸分違わぬ模写を作る。

「源氏物語絵巻」は、源氏物語を題材とした絵巻物のなかでは最古のもので、平安後期の作品と言われている。源氏物語の各54帖について、「詞書」と「絵」を交互に繰り返す形で構成されていたと考えられているが、現在確認できるのは徳川美術館所蔵の「詞書」と「絵」の合計43面と、五島美術館所蔵の同13面のみで、いずれも国宝である。

この国宝絵巻を現状のまま模写し、一般市民にも公開

して広く親しんでもらおうという試みが東京藝術大学で行われた。

もともと東京藝術大学には横山大観在学時以来、絵画技法習得の一環として古典研究模写を行ってきたという実績があった。平成15年度からは正規カリキュラムとして7年間にわたり徳川美術館、五島美術館所蔵の国宝「源氏物語絵巻」の現状模写に取り組んだ。

指導した同大学 美術学部 日本画研究室の手塚雄二教授は、今回の作業について次のように語る。

「模写という概念ではなく、国宝をもう一つ作るという意気込みで精力を傾けました。ご覧頂ければわかりますが、同じ作品にしか見えなはずですが」

この作業には卒業生も含め、56名の制作者が関わった。模写をするといっても国宝を直接見ることができるチャンスはわずかに3回しかない。制作工程は原寸大の写真に薄美濃紙をあてがって、上げ写しをするところから始まる。図柄や剥落の状態、皸、経年劣化の跡も含め原本



多数の観客が訪れた「国宝 源氏物語絵巻に挑む」展



原寸大の写真に薄美濃紙をあてがって上げ写しをしていく

### 担当者より



平成の文化遺産に  
ふさわしい展示会に  
なりました。

東京藝術大学 美術学部  
日本画研究室 教授  
手塚雄二さん

このプロジェクトの意義の重さに比較して、予算があまりにもないという状態でしたが、AJOSCの助成によって、国宝の現状模写にふさわしい成果発表を行うことができました。これらの作品自体、平成の文化遺産として長く伝えられると思います。同時に皆様のご見識とお志も伝えられるものであると考えています。

ん幸せなことで、また貴重な経験でした。極度の緊張のなかでの作業となりましたが、技術はもちろんのこと、平安時代の息吹に触れられたことは、若い芸術家たちにとって今後の大きな糧になるはずだと手塚教授は語る。

単なる教育上の成果だけではない。どれほど保管に気を配っても、作品は劣化していく。まして地震大国日本では、今後どのような災害が起こるか分からない。国宝に万が一のことがあった場合、現状模写が貴重な資料となることは間違いない。

大学に保管された現状模写作品は、東京藝術大学大学美術館で「国宝 源氏物語絵巻に挑む」と題して特別展示が行われた。現状模写とはいえ、現在に残る絵巻を一同に集めたまたとない機会である。2011年9月9日～9月25日に開かれた展示会には、2週間で1万3,000人の観客が訪れた。これは、同美術館の最高記録であり、源氏物語絵巻への関心の高さを示すものだろう。展示会では、徳川美術館所蔵の本物の国宝絵巻が5面展示され、観客たちはその絵と現状模写と見比べながら、完成度の高さに固唾をのんだのである。

今後は、日本国内や外国での展示も計画されている。国宝はそう簡単に持ち出すことはできないが、現状模写であれば可能だ。日本の古典美術の美しさと、現代の技術力を広く知らしめる芸術大使としての活躍が期待される。



極度の緊張の中、気の遠くなるような細かい作業が続く



このような体験は若い芸術家たちにとって今後の大きな糧になる

の情報を丹念に拾っていく。失敗は許されない。

その後ようやく彩色に入る。平安時代と同じと思われるコウゾ紙と絵具を慎重に選びながらの作業が続く。中には現代には残っていない絵具もあり、こちらは京都の職人に依頼して2年をかけて復元した。

「詞書」には文様を刷り込まれた料紙が使われる。これも筆でひとつひとつ再現していく。文字もまた絵として扱われるのである。

制作者の一人は「どんなに頑張っても、1日に小指の爪ほどしか描けない」と語った。

### 日本美術のすばらしさをより多くの人へ。

こうした気の遠くなるような作業が7年の歳月をかけて進められ、両美術館と東京藝術大学の保管用として56面の現状模写2つずつが完成した。

「国宝と直に比較しながら彩色を施せたことはたいへ